

科目名：音楽表現 (必修1単位)		担当教員：宮川多加子	使用テキスト：出版社名・テキスト名
		担当形態：単独	保育内容 領域 表現 日々わくわく生きる子どもの表現（わかば社）
科目	領域及び保育内容の指導法に関する科目	施行規則に定める科目区分又は事項等	領域に関する専門的事項 表現
授業の到達目標及びテーマ： 幼児の表現の姿や、その発達を理解する。音楽表現の基礎的な知識・技能を学ぶことを通し、幼児の表現を支えるための感性を豊かにする。			
授業の概要： 幼児期の表現の特性やそれを受け止めていくことの重要性、幼児の遊びや生活のなかに見られる素朴な表現に関し、映像や具体的事例を通して説明し、幼児の世界に関心を持つようにする。表現を生成する過程について、学生自身の体験を通して分析する。季節や行事、伝統芸能、文化的活動、伝承遊びについて映像等視聴覚教材を活用しながら学ぶ。			
回	項 目	内 容	
1	領域「表現」をどう捉えるか	感覚の時代を生きる3歳未満児の子ども表現と、意味の世界へと移行していく3歳以上の子ども表現について理解する。「表現」とは感性と知性の間にあり、子どもはより美しいもの、よりはっきりしたもの、よりおもしろいものへと向かっていく力をもっており、その志向性に沿って共に考え、対話し、環境を構成していくのが保育者の役割であることを学ぶ。	
2	環境を構成する保育者	幼児教育は環境を通して行うものであることを理解し、何を「表現」の題材とするかについて考える。自然、子どもを取り巻く生活、文化的環境が題材としてどのような意味を持つかを探る。子どもの表現を導く保育者の役割について事例を通して学ぶ。子どもを取り巻く生活の歌として、「おべんとう」を歌う。	
3	音楽と子ども—子どもと音楽の出会い	ハンマー・ダルシマーとギターデュオのコンサートを体験した2歳児たちのほとんどが眠り始めたり、子どもたちが音に合わせて自然に足踏みを始め伝播した事例から、人間は胎内にいた頃から音に出会い、心地よいリズムと共に成長してきたことを理解する。実際に園児が毎日歌う「おはようのうた」「おかえりのうた」を歌い、子どもたちが心地よく感じる歌い方を学ぶ。	
4	音楽と子ども—リズムが生む楽しさ	音楽の喜びの第一の要素は、そこに流れるリズムを共有し、世界をそれ一つに彩ることである。リズムは参加している人の呼吸によって形づくられ、その内容は、次への予測性と新奇性に支えられていることを理解する。様々なリズムの打ち方を学ぶ。	
5	音楽と子ども—子どもの歌唱の発達	歌唱について子どもがどのような習得の過程をたどるのかを学び、発達の道筋を念頭に園での子どもの歌について理解を深める。年齢ごとに子どもたちが園で歌う曲を学ぶ。	
6	音楽と子ども—歌のはじまり	歌の出発点は、心地よい声を聴くことから始まる。母親と赤ちゃんの間にある特徴的な音声表現であるマザーリーズについて学ぶ。言葉と同じように、歌の習得も聴くこと、模倣することから始まるので、保育者は自分の声に意識的になる必要があることを理解する。子どもと歌う場面で、心地よい歌の気分を出す声とはどのような声か、実際に季節の歌を歌って理解する。	
7	音楽と子ども—さまざまな場面と歌	保育者と子どもは、毎日の生活の中で、多様な場面を共有し様々な気分を分かち合っており、たくさんの歌が生まれる可能性があることを学ぶ。園庭や公園で生き物や植物と出会った場面を想定して季節の歌を歌い、子どもと一つの世界を共有することを理解する。	
8	音楽と子ども—手遊び	活動に入る前の導入とされている手遊びについて、子どもと音楽を共に楽しむという観点からの見直しが必要であることを学ぶ。手遊びはリズムの楽しさと共に、遊びの祖型であることを理解する。保育者と子どもが調子を合わせる、同調することによって、「いま＝ここ」にある	

		かけがえのない時空間をつくることができるのが手遊びであることを、実際に手遊びをすることによって学ぶ。
9	音楽と子ども—うたう喜び	事例を通して、うたう気分を共有する喜びとその喜びが主題となって遊びの世界が作られていくことを学ぶ。4～5歳になって歌詞を言葉として意味がわかっても、リアルな体験がベースにあってこそ歌詞がいきいきと動き出すことを理解する。実際に季節の歌を歌い理解を深める。
10	音楽と子ども—クラスで共にうたうこと	クラスで共にうたうことの難しさと、クラスで共にうたう体験を通して子ども同士のつながりを持てるようになることを理解し、そのために保育者自身がどのような表現者であるべきかを考える。実際に生活の歌を歌い理解を深める。
11	音楽と子ども—共にうたう楽しさと喜び	保育者は、歌詞やメロディーを伝える工夫ができる人であること、一人ひとりに丁寧な眼差しを送る人であることが、歌をうたう楽しさと喜びを支えるということを学ぶ。実際に行事の歌を歌って、歌の心地よさを体現するにはどのような工夫が必要かを理解する。
12	音の発見・音楽のはじまり	子どもが音・音楽に自ら聴き入り、わがものとして奏するにはどのような工夫が必要かについて、教育方法としての「プロジェクト活動」が展開されていることを学ぶ。その一例として、レッジョ・エミリアの実践を映像を通して学ぶ。
13	音の発見・音楽のはじまり	プロジェクト活動の1つである『『耳を澄ます』ことからはじまる音・音楽の世界』の実践例(奈良市立大宮幼稚園の実践)を学ぶ。
14	表現の場としての行事	表現の場としての生活発表会、音楽会、作品展などの行事があることを理解する。その場合、保育者主導の取り組みにするか否かなど方法論的課題について事例を通して整理する。発表会のような行事で保育者が留意すべき事項をグループで話し合う。また、保護者との連携としてどのようなことに配慮すべきかを検討する。
15	子どもの表現と保育者の援助	子どもを表現へと導いていく保育者の援助として大切なのは、「表現すること」を楽しんで見せることであり、苦手分野がある子どもに対して「すべきである」という強制的態度を保育者がとることは子どもに更に緊張を強いることを理解する。また、保育者の教材研究と環境の構成が大切であることを学び、実際に年齢ごとにグループ分けをして教材研究を行う。
	期末試験	
<p>参考書・参考資料：</p> <p>幼保連携型認定こども園教育・保育要領 保育所保育指針 幼稚園教育要領</p> <p>カツリキのうたあそび&運動会ダンス (世界文化社) 園行事を「子ども主体」に変える (チャイルド本社)</p> <p>こどものうた200 (チャイルド本社) 一人一人を大切にユニバーサルデザインの音楽表現 (萌文書林)</p>		
<p>学生に対する評価方法：</p> <p>期末試験、模擬保育の発表等で総合評価。</p>		